

## インドネシア、南東スラウェシ州の農村と農業 第1報 農村の現状と食生活

西村美彦

国際協力事業団、筑波国際農業研修センター  
305 茨城県つくば市高野台 3-7

**要約** 南東スラウェシ州はまだ開発は十分進んでいない地域であり、農村は伝統的農法を継承しながらも水田耕作が取り入れられ始めた。水田耕作は他の地域からの移住者によって伝搬されたもので、伝統的な農業も変わりつつある。クンダリのある半島部は先住民としてトラキ人が住んでおり、南部の島にはムナ人、ブトン人が先住民として住んでいる。彼らの伝統的農業は焼畑とサゴヤシで森からの採集を合わせ生計をたてており、この生活は自給を基本としたものであった。しかし異なる背景をもつ民族の移住によってもち込まれた、水稻栽培の農法は新しい村の形成に影響を与える大きな要因となっている。

村はトラキ語を語源として、約300世帯で形成されているが、先住民だけの村、移住者の混在している村、水田が導入されている村など発展段階の違いが認められる。クンダリ周辺の村では米、サゴ、トウモロコシが重要な主食となっており、村によって食する形態が変わっている。米はほとんどの村で重要な主食となっていたが、これにサゴデンプン、トウモロコシが加わり、わずかに芋、バナナも含まれている。主食となるものは民族の嗜好性と村の作物の生産状況によると思われる。以上のことから、この地域では焼畑を中心とした雑穀農業と湿地のサゴ採取農業が主流をなしていたが、水田耕作が新しく導入され多様な変化が始まっていることが明らかになった。

**キーワード** サゴヤシ、食生活、トラキ、南東スラウェシ、農村開発、焼畑

## Agriculture in the Villages of Southeast Sulawesi, Indonesia — Part 1: The Inter-Village Variations in Food Production and Consumption

Yoshihiko Nishimura

Tsukuba International Agricultural Training Centre, JICA, 3-7 Koyadai, Tsukuba 305, Japan

**Abstract** In Southeast Sulawesi State in Indonesia which has still been underdeveloped, there are four provinces, two located in the peninsular and inhabited by the Tolaki (including the Mekongka) and the other two located in the southern islands and inhabited by the Butonise and the Munaise. The traditional agriculture consisted of shifting farming and sago palm cultivation. Recently, however, paddy rice cultivation was introduced to the area largely owing to the transmigrants from Java, Bali and South Sulawesi, whose culture including rice cultivation had been developed. The villages in the peninsular are classified into three types: the first, inhabited exclusively by the indigenous ethnic group; the second, inhabited by the indigenous group and one transmigrated ethnic group; and the third, inhabited by the indigenous group and several transmigrated ethnic groups. The inter-village difference in ethnicity is closely related to the diversification of agricultural strategies, as represented by the relative importance of sago starch in some villages and that of maize, cassava, sweet potatoes and bananas in others in addition to rice as the staple.

**Key words:** Sago palm, Dietary life, Tolaki, Southeast Sulawesi, Rural development, Shifting cultivation

## 1. 緒言

インドネシアは赤道を挟んで大小、多数の島々からなる国であり、南北に1,900 km、東西に5,100 kmの広がりをもっている。これはアメリカ合衆国の東西の距離に相当する。まさに南国の海洋国家といっても過言ではない。この国は歴史的にはオランダの植民地として350年統治されたあと、日本軍の侵入を経て、インドネシア共和国として独立したのが50年前であり、国を形成してからまだ新しいといつてよい。したがって行政的には不備なところがあり、地方にいけばいくほど行政がうまく機能してしていない点は拭いきれない。このような社会状況で、インドネシア政府は1989/90年からの第5次国家開

発5カ年計画 (Repelita V) の中で拡大計画 (Extensification) を掲げ、増産の拡大と、都市と地方の格差是正をねらいとして、東部の未開発地の開発を重点地域と定めた。この中で南東スラウェシ州農業農村総合開発計画が国家プロジェクトとして取り上げられたが、この計画は南東スラウェシ州政府が進めている“GERSAMATA” (総合農村開発の戦略) 計画に符合している。

南東スラウェシ州は1990年現在、人口135万人でインドネシアの総人口の0.75%であり、人口密度は49人/km<sup>2</sup>とジャワ島の814人/km<sup>2</sup>に比べはるかに低い。また1991年のGDPは9,760億ルピアで全国の0.4%を占めるに過ぎない。そしてここにはまだサゴヤシからのデンプン採取農業が営まれていて、陸稲、トウモロコシが焼畑

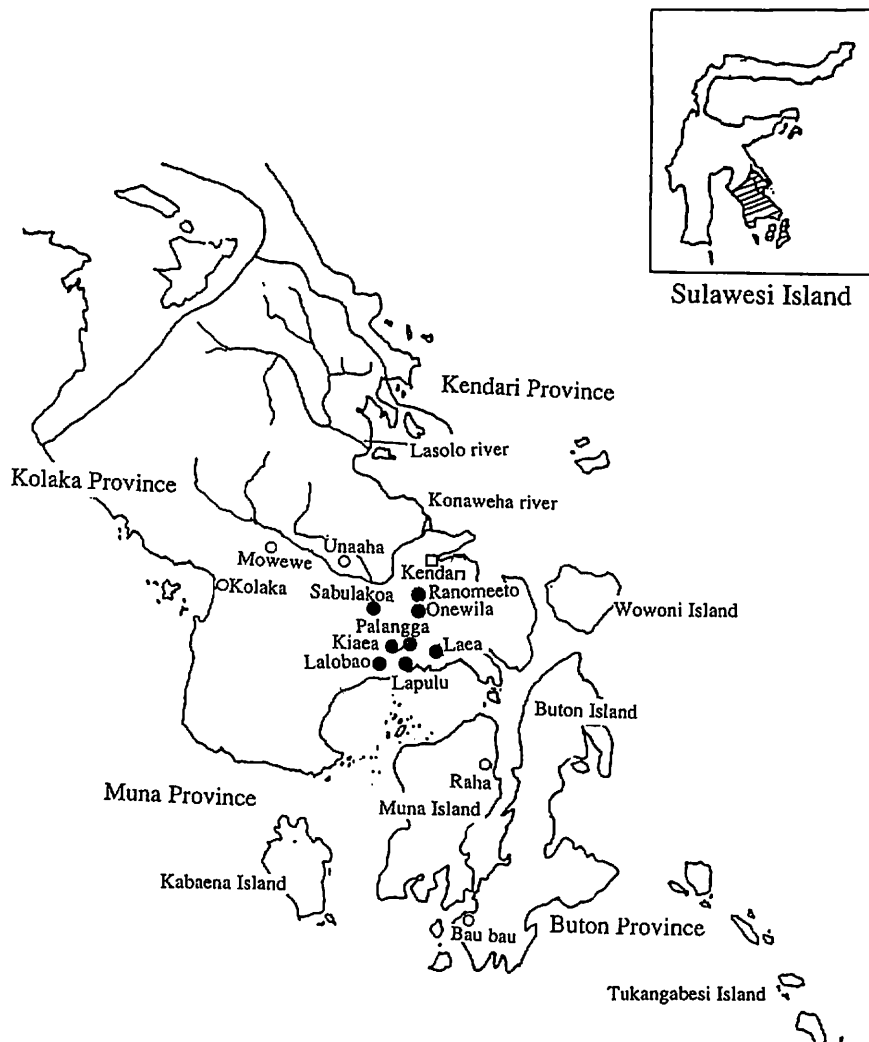


図1 南東スラウェシ州におけるプロジェクトを実施した地域。

で栽培される。これらの伝統的農業に近年では水稻栽培が加わり、水田が増加している。水田面積はすでに5.8万haあり、1990年の収穫面積は3.5万haで、単収は籾で3,439 kg/haとジャワ島の平均単収5,328 kg/ha、全国平均4,800 kg/haよりも低い。農林水産業就業率(10歳以上)は71%で、全国平均の53%より高い。また、小学校の生徒数が23.7万人であるのに対し、中学校の生徒数は4.5万人と高等教育の就学率が極端に低い。このように、南東スラウェシ州はインドネシアの中でも開発が遅れている地域として位置づけられ、農村開発の重要性が高まっている。

本プロジェクトがJICAの協力で実施されることになり、筆者は1991年から1994年までの3年間、専門家として南東スラウェシ州のクングリ市に派遣された。その間、村の開発に必要となる現況把握を目的として、この地方の農村と農業の実態を調査したので、その結果を報告する。

## 2. 調査地および調査方法

本調査は、JICA協力プロジェクトの対象とした南東ス

ラウェシ州クングリ県に位置する8カ村で行った(図1)。クングリ県は南東スラウェシの半島部に位置し、先住民としてトラキ人が住んでいる。南には大きな島としてブトン(Buton)、ムナ(Muna)、カバエナ(Kabaena)の3島がある。ここはブトン県、ムナ県の2行政区としてトラキ人とは区別されるムナ人とブトン人が住んでおり、昔から海洋民族として香辛料の交易に当たっていた。トラキ人以外にも、一部国家移住計画でジャワ島、バリ島、南スラウェシ(ブギス人、トラジャ人)等の地域から入植してきた移住民も住んでいる。本調査の対象となった村は、先住民だけの村と移住民が混在する村に区分される。

調査はプロジェクトの8カ村を踏査し概要を把握するとともに、村の役場、農業普及所から情報を収集した。また、村人に対するアンケート調査は村の集会所で実施した。

## 3. 結果と考察

### 1) 民族の特徴

農業開発を考える場合、まず民族構成を知ること、村の農業形態が考察できると考える。すなわち、民族が独

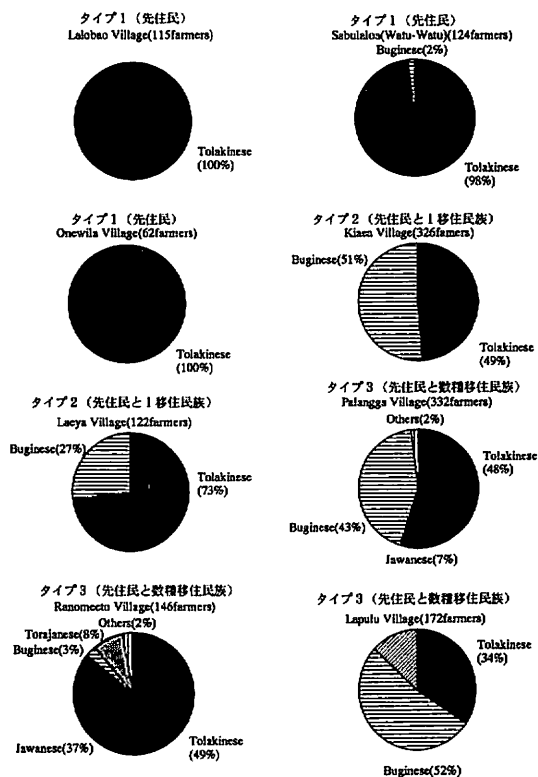


図2 村の民族構成による区分け。

自の農業を長く継承しているからである。調査の結果によると先住民だけの村、先住民と1移住民族からなる村、先住民と複数の移住民族からなる村と3区分された(図2)。また関係する民族の出身地の特徴を表1に示した。これから半島部の先住民トラキ人、島嶼部のムナ人、ブトン人は水田耕作を元々行っていない。他方、移住民のブギス人、トラジャ人、ジャワ人、バリ人は古くから水田耕作技術を持っていた。

表2に8カ村の人口、男女数、世帯数、農家数、人口

密度、各農民組合数、民族構成のデータを示した。また、8カ村の土地利用を表3に示した。これらをもとに、最初に開発が手がけられた3カ村の概要を、さらに詳しく以下に記述する。

## 2) 村の概要

### i) ラノメト村

ラノメトとはトラキ語で『黒い湿地』という意味である。この由来のとおり村には湿地が広がり、そこは荒れ

表1 南東スラウェシ州先住民族と移住民族の特徴

民族	トラキ	ムナ	ブトン	ブギス マカサル	トラジャ	ジャワ	バリ
先住地	南東スラウェシ 半島部	南東スラウェシ ムナ島	南東スラウェシ ブトン島	南スラウェシ	南スラウェシ 北部	ジャワ島	バリ島
環境条件	湿地/山地	海洋/島 (丘陵)	(海洋/島) (丘陵)	海洋 (水田-丘陵)	山岳 (盆地)	低地/丘陵	丘陵
農業	焼畑(陸稲, 粟) サゴ カカオ カシューナッツ	焼畑 (トウモロコシ 粟) カシューナッツ ラタン チーク	焼畑 (トウモロコシ ヤム, ソルガム) キャッサバ ココナッツ カシューナッツ	畑作 (陸稲, 粟) 水田 チョウジ コシヨウ	畑作 水田(湿地) 野菜 コーヒー	畑作(混作) 水田(灌漑) サトウキビ 大豆 複合農業	水田(灌漑) ヤシ 果樹

表2 南東スラウェシ州プロジェクト8カ村の基礎的データ(1992年現在)

村名	Ranomeeto	Palangga	Kiaea	Lolobao	Lapulu	Laeya	Sabulakoa	Onewila
1. 人口	1,808	1,442	1,371	624	1,425	920	1,684	895
2. 男	916	725	634	294	662	450	846	364
3. 女	892	717	640	330	682	470	838	320
4. 世帯数	325	286	307	116	285	207	355	179
5. 農家数	312	264	292	110	285	177	286	138
6. 農家外就業者数	13	22	15	6	-	30	69	41
7. 人口密度(人/km <sup>2</sup> )	115.2	26.2	30.8	7.6	19.5	40.6	40.9	66.6
8. 農民グループ数	11	14	11	5	7	7	13	5
9. 水管理組合数	2	-	-	-	local 3	-	1	-
10. 村落協同組合数(KUD)	1	-	-	-	-	-	1	-
11. 農民グループメンバー数	146	332	326	115	172	122	124	62
11-1 トラキ人(割合)	71(48.6%)	158(47.6%)	186(48.8%)	115(100%)	58(33.7%)	98(73%)	142(98.4%)	62(100%)
11-2 ジャワ人(割合)	54(37.0%)	25(7.4%)	-	-	-	-	-	-
11-3 ブギス人(割合)	4(2.7%)	144(43.4%)	65(51.2%)	-	90(52.3%)	33(27%)	5(1.6%)	-
11-4 トラジャ人(割合)	12(8.2%)	-	-	-	(Balinese)	-	-	-
11-5 その他の民族(割合)	5(3.4%)	5(1.5%)	-	-	24(14.0%)	-	-	-

表3 村の土地利用状況

土地利用 村名	Ranommeto	Palangga	Kiaea	Lolobao	Lapulu	Laeya	Sabulakoa	Onewila
1. 庭先畑 (ha)	64	23	13	144	456	81	70	37
2. 水田 (ha)	72	60	30	26	139	0	7	7
3. 畑地 (ha)	0	0	271	150	175	137	56	56
4. 混作畑 (ha)	32	640	246	575	561	106	34	34
5. 草地 (ha)	248	693	819	6,057	3,296	0	249	249
6. 灌木地 (ha)	248	807	604	0	0	275	156	156
7. 森林 (ha)	907	2,913	689	0	613	1,667	807	807
8. 放牧地 (ha)	0	365	1,757	1,292	1,980	0	0	0
9. 湿地 (ha)	0	0	0	0	88	0	0	0
10. 合計 (ha)	1,570	5,501	4,456	8,244	7,308	2,266	4,118	1,344

(註) データは1991年12月現在の村役場の資料からとりまとめた。

地と水田、サゴヤシ林になっている。丘陵地にはカシューナッツ、カカオ等のエスレート作物が植えられている。民族構成は先住民のトラキと数移住民族の混在する村で、ジャワ人は1959年から入植してきた。彼らは1937年頃に日本軍によってウジュンパンダン、ラハ、コラカに連れてこられた人たちである。トラジャ人の入植は新しく1965年以降であり、プギス人はそれよりもさらに新しい移住民である。

村の統計によると、1992年当時の人口は1,808人、362世帯であった。そのうち302世帯が農家である。また村の民族の割合はトラキの人口が約半数の49%、ジャワ37%、プギス2.7%となっている。この地はクダリ市から20kmと近いので、農家の兼業化が進み、土地の売買の増加など農業外の収入源がふえつつあり、新しい社会・経済の動きが見られる地域である。1991年現在の耕地は167haで、その内訳は水田が72ha、庭先畑が62ha、畑地が0ha、エスレート作物混作園(主としてカシューナッツ、カカオ)が32haとなっている。水田の耕作は、湿地部の開墾により増えつつある。カシューナッツとカカオも多少増加しているが、ココナツは減る傾向にある。この村の特徴としてクダリ市へ労働者としての出稼ぎや、行商など農家の半数近くは農業以外からの収入源をもっている。

#### ii) バランガ村

バランガとはトラキ語の『集まる所』という意味の村名で、クダリとティナンゲア村の中継点に位置し、人々が立ち寄る地区であった。トラキ人以外に、9年前に南スラウェシのシンジャイ市のプギス人がスポンタンとして自主的に入植してきた村で、先住民と新住民が混在している。入植者は現村長の親から土地の提供を受けた経緯

があり、村長は村で絶対的権限をもっている。

村の人口は1992年の村の統計によると1,427人で286世帯あり、トラキ人が48%、プギス人が43%とほぼ半々になっている。村民のほとんどが農民であり、教員、村の役人等の公務員以外の職業は限られていて、商業を営む人がわずか8%いるだけである。1991年現在の耕地は723haで、水田が60ha、庭先畑が23ha、畑地が0ha、エスレート作物混作園が640haとなっている。水田は川の流域の平坦地に沿って開墾されており、開墾はさらに進むと思われる。なお、実際に耕作されている水田は土地所有とは必ずしも整合していない。丘陵地はカシューナッツ園が主体になっていて、残りは焼畑の跡地に生えているチガヤ(アランアラン)の草地になっている。河川が小さいために乾季の水が農業にとって問題となっている。

#### iii) キアエア村

トラキ語で『美しい村』と呼ばれる村で、バランガ村に隣接し、もとは同一の村であった。1992年の村統計によると、人口は1,275人で村の民族構成もバランガ村とほぼ同じで、先住民のトラキ人が49%、プギス人が51%と混在した村である。世帯数は281戸で、農家戸数は271戸と97%にあたっている。村長は村の旧家の出身の女性で、バランガ郡の郡長、バランガ村の村長夫人と従姉妹である。1991年現在の村の統計では、耕作地は559haで、うち水田が30ha、庭先畑が13ha、畑地が271ha、エスレート作物混作園が246haとなっている。水田は、丘陵地の間に広がる低地部に10ha以下の小規模なものが点散しているにすぎないが、今後水路の布設によって増える可能性が十分ある。丘陵地には、陸稲、トウモロコシなどが雨季に植えつけられる。

表4 ラノメト村の食生活調査

a. 主食率	
i) 米	100 %
ii) サゴ	42.7%
iii) トウモロコシ	14.6%
iv) キャッサバ	12.5%
v) バナナ	1.0%
b. 主食のタイプ	
i) 米	44.8%
ii) 米+サゴ	32.3
iii) 米+トウモロコシ	4.2
iv) 米+キャッサバ	3.1
v) 米+トウモロコシ+キャッサバ	5.2
vi) 米+トウモロコシ+サゴ	3.1
vii) 米+サゴ+キャッサバ	4.2
viii) 米+サゴ+キャッサバ+トウモロコシ	2.1
ix) 米+サゴ+キャッサバ+バナナ	1.0

(註) 96人の主婦からのアンケート調査による。

表5 バランガ村の食生活調査

a. 主食率	
i) 米	97.8%
ii) サゴ	30.7%
iii) トウモロコシ	20.4%
iv) キャッサバ	4.4%
b. 主食のタイプ	
i) 米	62.0%
ii) 米+サゴ	16.8%
iii) 米+トウモロコシ	5.8%
iv) 米+トウモロコシ+サゴ	9.5%
v) 米+トウモロコシ+サゴ+キャッサバ	3.6%
vi) サゴ	0.7%
vii) トウモロコシ	0.7%
viii) トウモロコシ+キャッサバ	0.7%

(註) 137人の主婦からのアンケート調査による。

### 3) 村の食生活

伝統的慣習がまだ残るクンダリ市周辺では、村のほとんどが自給自足の生活を基本としている。この中でサゴヤシデンプンが先住民の重要な食糧となっている。すでに多くの人々は米を主食にしているが、地方に行けば行くほど主食としてサゴヤシが重要さを増している。

村の食生活を調査することは農業を知る上で有意義で

表6 キアエア村の食生活調査

a. 主食率	
i) 米	99.4%
ii) サゴ	52.6%
iii) トウモロコシ	42.1%
iv) キャッサバ	2.9%
b. 主食のタイプ	
i) 米	31.6%
ii) 米+サゴ	25.7%
iii) 米+トウモロコシ	14.6%
iv) 米+トウモロコシ+サゴ	24.6%
v) 米+トウモロコシ+キャッサバ	1.2%
vi) 米+トウモロコシ+サゴ+キャッサバ	1.8%
vii) サゴ	0.6%

(註) 171人の主婦からのアンケート調査による。

ある。上記のラノメト村、バランガ村、キアエア村の3村の婦人達にアンケート調査を実施した。調査は村の婦人研修に参加した人々を対象に、1日3食について、「主食はなんですか」との記述質問を行い、複数回答も可とした。この婦人研修には村の1/3から半数近くの婦人が参加した。その結果から、主食率(主食としての頻度)、主食のパターン(主食の形態の割合)として村ごとにまとめ、表4, 5, 6に示した。

#### i) ラノメト村

この村はクンダリ市に近いこともあり、他の村に比べ都市型の生活に近い。表4に示されるように、主食として食べているものとして、すべての家庭で米をあげているものの、米だけでなく他のものを主食に加えている家庭も多い。すなわち、主食を米だけと答えたのが約半数の45%で、残りの人は米と他の物を加えた複数の物を主食にしている。米と組み合わせるものでは、サゴデンプンが42.9%、トウモロコシが14.6%、キャッサバが12.5%、バナナが1.0%であった。依然としてサゴが重要な主食の仲間に入っていることが知られた。なお、ジャワ、ブギス、トラジャ人は米だけを主食にする傾向にあり、トラキ人が米とサゴデンプンなどを組み合わせた食生活をする傾向にある。トラキ人の食生活は朝にサゴデンプンを、昼食と夕食に米を食べるのが一般的である。

#### ii) バランガ村

米を主食とあげた主婦は約98%を占めており、米のほかにサゴデンプン、トウモロコシ等も主食として加えている(表5)。米だけと答えたのは62%の約半数でラノメト村よりも高い。米にサゴを主食に加えた人の割合は

30%、トウモロコシを加えた人は20%で、ともにその重要性が知られるが、キャッサバはわずか4%にとどまっている。パラガ村はブギス人とトラキ人がほぼ半数ずつからなっており、米だけの主食率が高いのはブギス人が多いためと思われる。

### iii) キアエア村

キアエア村はトラキ人、ブギス人が半々で、主食はやはり米で99%の人があげている(表6)。しかし、ここも米だけでなく他のものも主食に加わっている。米だけを主食とするものは31%と他の2村よりやや低い。それに比べ米に、トウモロコシやサゴを加えて主食としている人の割合は約50%あった。すなわち、米だけを主食とする家庭はなお少なく、サゴやトウモロコシを主食に組み入れる家庭が多いことが認められる。特に両民族とも、ここではトウモロコシの消費が多い。キャッサバも約3%と、少ないながらも主食の一部に加えられている。

この結果、ラノメト村は米の依存度が100%であるが、米だけを主食としている家庭は約半数であり、都市化が進んでもなおサゴデンプンを加えている家庭も多い。この現象は、先住民トラキ人が村の人口の半数を占めていることによるものと考えられる。また比較的近くの村からサゴが入手しやすいことも、ここでの消費を支えているものと思われる。他方、パラガ村の米の食頻度はラノメト村とほぼ同じであるが、米だけを主食とする割合は他の2村よりもはるかに高く62%にもほり、より重要な食糧となっていた。それだけサゴデンプン等の他の作物への主食依存率が減っている。この理由は、この村の周辺が米の生産地となっていることに加え、ブギス人が村民の半数を占めているためと思われる。

同様にトラキ人とブギス人が半々のキアエア村では、米をほとんどの人が食べているが、米だけを主食としている人は1/3であり、3村中一番低い割合となっている。それに代わりトウモロコシの消費が3村中最も多く、42%の人が食べている。またサゴデンプンも半数の人が食べており、この割合も3村中一番多い。この理由として水田の面積が30haと3村中最も少なく、米がまだ十分に生産されていないためと考えられる。

以上のように、食生活において民族のもっている食習

慣が継承されるとともに、村の作物の生産状況によって食生活が決まるものと考えられる。

## 4. まとめ

南東スラウェシはインドネシア独立後、国家移住計画のもと、ジャワ、バリなどの農民を移住民として東部地区に入植させた。また同時にスポンタンという自主的移住として近隣のブギス人などの入植がみられ、彼らによって水田耕作が導入された。これに伴い伝統的サゴ採取は年々減りつつも、食糧としてのサゴデンプンは依然重要なものとなっている。サゴは伐採により減少し、陸稲は焼畑の禁止により減少しているため、伝統的農業は衰退する傾向にある。これに代わり水田は荒地の開墾などにより拡大し、水稻はますます重要性が増すものと思われる。村も伝統的形態から新しく導入された作物栽培の体系へと変化していく。例えば水田耕作に必要な水の確保、インフラ整備、圃場管理における農民グループの強化、販売体制など、新しい村の対応が必要となっている。

## 引用文献

- Jusuf Abadi 1993 Survey on social economic factors and population verfare rate in the region of Kendari regency, Southeast Sulawesi province.  
Economic faculty the University of Sulawesi Tenggara. (This is unpublished report written in Indonesia)
- 金谷尚知・松原英治・松中達夫・土性清稔 1995 インドネシア国村づくり協力プロジェクトとその支援 活動。農業土木学会誌 63 (2): 149-154.
- 農用地整備公団 1990 海外村づくり基礎調査事業報告。インドネシア。pp. 289.
- 田中耕司 1982 南スラウェシ州ルウ県北部への人の移動と水田農耕の技術変容。東南アジア研究 20 (1): 60-93.
- 西村美彦 1994 インドネシア農業・農民組織調査報告書、南東スラウェシ州農業農村総合開発計画、州外調査。国際協力事業団。pp. 226.